

氏名	永嶋 昌樹
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 71 号
学位記授与の日付	2020 年 3 月 13 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	里孫活動による世代間交流に関する研究
論文審査委員	審査委員長 田村 真広（副指導教員） 審査委員 佐々木 由恵（主指導教員） 審査委員 斉藤 くるみ 審査委員 金子 恵美 審査委員 有村 大士

題目：里孫活動による世代間交流に関する研究

A Study on Intergenerational Interaction by Foster Grandchildren Program

氏名：永嶋昌樹 Masaki Nagashima

要旨：

本研究の目的は、高齢者と子どもとの交流活動に着目して、地域共生社会を実現していくための一助となる、里孫活動による地域連携モデルを提唱することである。

わが国では、高齢化の進展とともに三世帯世帯が大幅に減少し、65歳以上の者のいる世帯では単独世帯と夫婦世帯が急増している。これに伴い、高齢者の家族内での役割や、祖父母と孫との交流も減少している。このような背景から世代間交流の必要性が叫ばれ、学校や福祉施設を中心として高齢者と子どもとの世代間交流活動が行われている。その中でも里孫活動は、個別的で継続的な交流を特徴とする。

高齢者の6割は世代間交流への参加意向があることが知られている。子どもについては、高齢者と現在も交流していることが、実の祖父母等以外の高齢者との交流意向につながる可能性があることが示唆される。

現在、わが国で確認された里孫活動の事例は全部で20件であり、現在も継続して行われている事例は7件である。「里孫」という名称を使用しないで行われている類似の活動は、ほぼ存在しないと考えられる。

里孫活動の担当者を対象とした聞き取り調査の結果からは、活動を促進させる要因として、保護者や家族からの理解、地域からの支援体制、担当者の主体的な関わり等が影響していることが明らかとなった。

これらを踏まえ、里孫活動の形態として「ルース・カップリング型里孫活動」を提唱する。これは、はじめから擬制的家族グループを想定した、少人数のグループによる里孫活動である。また、里孫活動による地域連携モデルの提言として、「コーディネーターの必要性とその教育」を提案する。子どもに対しては、「里孫講習会」を通して十分なレクチャーが必要である。さらには、「里孫活動運営委員会の設置」により、地域のさまざまな社会資源が関与することが求められる。

なお、里孫活動の波及効果として、将来的に介護福祉士等を志す者が増えることが期待される。

Abstract :

The purpose of this study is to focus on the interaction between the elderly and children, and to propose a regional alliance model through Foster Grandchildren Program that will help to realize a community-friendly society.

In Japan, the number of three-generation households has decreased significantly with the aging of the population, and the number of single-person households and married couples has rapidly increased in households with persons aged 65 or older. Along with this, the role of the elderly in families and the interaction between grandparents and grandchildren are also decreasing. Against this background, the necessity of intergenerational exchanges has been called out, and intergenerational exchange activities between the elderly and children have been conducted mainly in schools and welfare facilities. Among them, Foster Grandchildren Program are characterized by individual and continuous exchanges.

It is known that 60% of the elderly intend to participate in intergenerational exchanges. Regarding children, it is suggested that the fact that they are still interacting with the elderly may lead to an intention to interact with elderly people other than their actual grandparents.

At present, a total of 20 cases of Foster Grandchildren Program have been confirmed in Japan, and 7 cases are still ongoing. Similar activities conducted without the use of the name "foster grandchild" are considered to be almost nonexistent.

According to the results of interviews with staff in charge in Foster Grandchildren Program, the factors that promote their activities are "understanding from parents and their families", "support from the community", "involvement of the people in charge" and so on.

Based on these facts, we propose "Loose Coupling Type Foster Grandchildren Program" as a form of Foster Grandchildren Program. This is a program by a small group that assumed a fictitious family group from the beginning. In addition, we propose "necessity of coordinator and its education" as a proposal of regional cooperation model by Foster Grandchildren Program. For children participating in Foster Grandchildren Program, sufficient lectures are required through the "Foster Grandchildren Program workshop". Furthermore, the "establishment of the Foster Grandchildren Program Steering Committee" requires the involvement of various social resources in the region.

In addition, as a ripple effect of the Foster Grandchildren Program, it is expected that the number of care staff such as Certified care workers will increase in the future.

## 【審査結果の要旨】

### 1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	田村 真広	学校カリキュラムの歴史と理論、福祉教育論
審査委員	佐々木 由恵	高齢者保健福祉 介護サービスサイエンス
審査委員	斉藤 くるみ	手話言語学、脳神経言語学、障害学、コミュニケーション論
審査委員	金子 恵美	地域における子ども家庭支援、保育と家庭支援
審査委員	有村 大士	子ども家庭福祉

2019年10月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11月28日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、2020年1月7日及び1月17日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行った。その結果、5名の審査委員全員が合格とし、審査委員会において第3次予備審査の合格が了承された。次いで、2月5日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士(社会福祉学)の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。それを踏まえ、審査委員5名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2020年2月20日の社会福祉学研究科委員会にて審査結果が提案され、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2020年3月13日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

### 2 博士論文・最終試験の評価

本論文は、世代間交流活動の一形態である里孫活動を主題としている。里孫活動とは、①互いが縁戚関係にはなく、②高齢者と子どもが、③犠牲的な祖父母・孫関係を築き、④原則として1対1で個別のかつ、⑤継続的に交流する取り組みである。本論文の目的は、高齢者と子どもによる世代間交流活動に着目しつつ、地域共生社会の実現につながる里孫活動による地域連携モデルを提起することである。本論文の結論には、里孫活動による地域連携モデル(模式図)が提示され、モデルに基づく事業展開によって、個と個の結びつきが強化されることで地域住民の相互理解が促進され、高齢者の役割創出、子どものソーシャルスキルの獲得、介護福祉士等の福祉職従事への動機付けがなされると展望している。

1999年にオランダで国際世代間交流協会が創設され、2010年には日本世代間交流学会設立されている。社会福祉・介護福祉系や教育系の学術学界を見渡しても、本論文で対象とされている里孫活動は、世代間交流に関する学際的研究の中に位置づけられる独創性の高い研究主題であり、

このことは申請者の自立した研究能力を示している。

第1章では、児童期と高齢期における役割理論、心理・社会的発達理論に加えて、祖母仮説、生理的早産説に論及し、世代間交流に関する先行研究を取り上げて、里孫活動の調査と実践の有効性を根拠づけた。第2章では、小学生5・6年生を対象として高齢者に関する意識調査を行い、子どもの高齢者に対する肯定的感情を育むための仕組みと働きかけが必要との結論を導いた。第3章では、里孫活動に関するインターネット検索と電話による調査を行い、2010年と2019年時点での里孫活動の全体像を把握した。第1次で10件、第2次で7件を確認した。第4章では、都道府県及び市区町村社会福祉協議会の把握している計1,000団体を対象に、「里孫」とは異なる名称で実施されている活動を把握する調査を行った。その結果、里孫活動のように擬制的親子関係を結ぶ個別的かつ継続的な世代間交流活動に該当する活動はないことが明らかになった。第5章では、現在でも継続して取り組まれている里孫活動の3事例について、活動担当者を対象としたインタビュー調査を行い、質的データ分析法である定性的コーディングによる分析を行い、活動を促進させる要因と抑制要因を分析した。担当者の明確な意思、保護者・家族からの理解・協力、地域からの支援、地域の大切な資源としての存在、施設職員や学校教員による子ども達への働きかけが、里孫活動の継続に欠かせないことが明らかとなった。第6章では、里孫活動の特徴である「1対1の個別性」「継続性」「擬制的祖父母・孫関係」の観点から、里孫活動の研究と実践への展望と課題を総括的に論じている。1対1の関係性を「ルース・カップリング型」に転換し組織し直すという提案であり、里孫活動による地域連携モデルの創出である。序章第4節に研究倫理審査の承認が明記されている。各章においても適宜、倫理的配慮が記されている。

本論文の分析や考察から看取されるのは、里孫活動に対して客観的なエビデンスに基づいた調査研究が少ないなかで、申請者が社会福祉実践の向上や発展に対する並々ならぬ意欲と高度の研究能力を有しているということである。

以下では、本論文の公表に臨み、あるいは今後の研究の進展に期待を込めつつ、審査過程で提起された課題について述べる。

一つめは、調査サンプル数の少なさや、当事者の声が把握できていない点などからくる限界である。人生100年時代を生きる高齢者自身が、どのように振る舞うことで活性化するのかという視点は重要である。サンプルを増やすとともに、限られたデータを丁寧かつ鋭角的に分析に努めるべきだろう。二つめは、FGP(Foster Grandparent Program)に関する内外の先行研究を精査すべきである。里孫活動の可能性を指摘する先行研究は、アメリカにおいて散見される。三つめは、第6章「総合考察・結論」を加筆修正し、各章における成果や得られた知見との因果関係を明確にしつつ、統合的かつ探究的に論じることである。

擬制的な祖父母・孫関係は、近現代家族研究に変革をもたらすだろう。継続性を主旨とする多世代型交流活動、シェアハウス、看取りなどに端緒が見られるのではなかろうか。ウェルビーイングやメンタルヘルスを構成する社会関係資本として、里孫活動に関する研究は世界的な関心へとつながっている。社会福祉学の豊かな学識を発揮し、そのような文脈に位置づけて本研究を継続されたい。